

青年期女子のうつにおけるパーソナリティと認知の歪み： 「新型うつ」と「従来型うつ」との比較検討

Personality and cognitive distortions in adolescent females
with depressive symptoms: Analyses of a new type of depression
in comparison with conventional depression

古屋 千瑞子
跡見学園女子大学人文科学研究科
臨床心理学専攻
Chizuko Furuya
Graduate School of Humanities,
Division of Clinical Psychology,
Atomi University

中野 敬子
跡見学園女子大学
Keiko Nakano
Atomi University

要 約

本研究では「新型うつ」におけるパーソナリティ傾向と認知的特徴を、「従来型うつ」との比較において検討した。さらに「新型うつ」のパーソナリティ傾向における認知的特徴についても検証した。SDS 自己評価式抑うつ性尺度で測定した「従来型うつ」の得点を従属変数、「新型うつ」に関連するパーソナリティ及び認知的特徴を独立変数とした重回帰分析の結果、「自己優先志向」のパーソナリティ傾向および「推論の誤り」の認知的特徴が「従来型うつ」に影響を及ぼすことが示された。「新型うつ」の症状・心理・行動特性項目得点を従属変数とした重回帰分析では有意な結果が得られなかった。次に「従来型うつ」、「新型うつ」を独立変数とした分散分析を行った結果、交互作用には有意な結果が得られず、「新型うつ」得点のみが高く、「従来型うつ」得点が低い人に「新型うつ」のパーソナリティ傾向が強くみられるわけではないことが示された。さらに「新型うつ」に関連するパーソナリティにおける認知的特徴を検証するために行った重回帰分析の結果、「新型うつ」に関連するパーソナリティの「対人過敏」と「自己優先志向」においては、それぞれに特有の認知的特徴が認められた。本研究では、「従来型うつ」の症状を多く呈する青年期女子には、「新型うつ」のパーソナリティ特徴も多くみられるという結果が示された。

【Key Words】「新型うつ」、「従来型うつ」、パーソナリティ、認知の歪み、青年期女子

I 問題と目的

近年、若い世代を中心に、従来型のうつ病とは異なる「新型うつ」なるものが、世間やマスコミをにぎわしている。生田

(2014)によれば、「新型うつ」は、精神医学的にみれば、言わばゴツタ煮のようなもので、疾患としてのうつ病や軽度の精神病、神経症、ある種のパーソナリティ障害、適応障害、怠業や逃避行動、あるいは健常

者における一過性の不適応行動まで含まれている。従来のうつ病は、真面目、几帳面、完全主義の中高年齢層に多かったが、最近では、わがまま、自分勝手、無責任といった若年層に多く発症している。「新型うつ」には、心理・社会的な問題が強く関係していると指摘されており(阿部, 2011), その発生や持続にパーソナリティが関与していると考えられ、その特異な個人要因を明らかにしていこうとする研究がみられる。

関・根津(2015)は、「自己愛」, 「他者評価過敏性」, 「規範意識度」の特徴に着目した「新型うつ」のパーソナリティにおいて、ストレス対処能力が抑うつ症状に影響するのか否かを検証した。その結果、「新型うつ」のパーソナリティ傾向の人は、ストレス対処能力が低いため、抑うつ傾向が高くなるという関係が示された。村中ら(2015)の研究では、「新型うつ」におけるパーソナリティを明らかにするため、心理的特徴を14の書籍から抽出し、KJ法で整理したところ、「対人過敏傾向」と「自己優先志向」が認められた。「対人過敏傾向」は、「評価への過剰な反応」, 「評価への敏感さ」, 「回避」の3因子から成り、他者からの評価を過度に気にしたり、過剰に反応したりする傾向を表している。「自己優先志向」は、「独善」, 「被害者意識」, 「成果依存」の3因子から成り、自己の快を他者や集団よりも優先させて追及しようとする傾向を表している。さらに、精神科医13名と臨床心理士11名が検証したところ、「自己優先志向」は「新型うつ」のみに見られる特徴である一方で、「対人過敏傾向」は、「従来型うつ」にもみられる特徴であることがわかった。

Beck et al. (1979)は、うつ病患者には低い自尊感情、強い自責感、過度の責任感、強い逃避願望、不安といった特有の思考内容と独善的な持論、選択的な抽象化、過度の一般化、誇張、不正確なラベリングといった特有の非論理的で非現実的な思考パターンである「認知の歪み」がみられるとした。そのため、抑うつを引き起こす原因として、物事を否定的にとらえる認知の歪みの影響が大きいことを示唆した。情緒的に落ち込んでいる時、人は否定的で悲観的な考え方に苦しめられているが、心理的援助では、いかに自らの思考の誤り(認知の歪み)が悲観的な感情に結び付いているのかを知り、その誤りに気付かせていくことになる。そのため、この「認知の歪み」を知ることこそ、うつ病を治す鍵である(Burns, 1980)とも言われている。

近年、大学生の診断基準に満たない軽度の抑うつ経験率の高さが問題となっている(及川・坂本, 2007)。それが学業や対人関係における心理社会的不適応となり、進学や就職に支障が出る事態につながりかねない為、青年期のうつについて明らかにしていく必要がある。発症以前における性格や認知的特徴に着目し、発生メカニズムを検証することは、心理学的予防および臨床的介入を検討するうえで、有用であると考えられる。

本研究における第一の目的は、青年期の女性を対象として、従来型の抑うつ尺度により測定される抑うつ症状を多く示す人は、「新型うつ」に関連するパーソナリティ傾向を示すのか否かを検証することであった。さらに従来型うつ症状を多く呈する対象者に、どのような認知的特徴があるのか

も検討する。第二の目的は、「新型うつ」の質問項目で特徴を多く示した人は、「新型うつ」に関連するパーソナリティの傾向を示すか否かを検証し、どのような認知的特徴があるのかも検討する。第三の目的としては、青年期女子の「新型うつ」に関連する「対人過敏傾向」、「自己優先志向」のパーソナリティでは、どのような認知的特徴があるのかも検証する。

II 方法

1. 対象者と手続き

女子大学生266名(平均年齢=18.6, $SD = .78$)、に対し質問紙調査を行った。尚、質問紙への回答は任意で無記名で行われた。

2. 評価材料

1) 認知の歪み尺度(改訂版)

三川(2004)による認知の歪みのカテゴリーにしたがって作成された、「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」の3つの下位尺度から構成されている尺度である。さらに、「認知の偏り」は、「全か無か思考」、「肯定面の否認」、「選択的抽出」の3下位尺度、「推論の誤り」は、「過度の一般化」、「破局視」、「恣意的推論」、「因果関係づけ」、「自己関連づけ」、「感情的理由づけ」、「抽象的な質問」、「否定的予測」の8下位尺度、「思考の非柔軟性」は、「断定的思考」、「誤ったレッテル貼り」の2下位尺度からなる。各下位尺度は4項目からなり、全52項目に対して、「ほとんどあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の5件法で回答する。いずれの下位尺度においても Cronbach's $\alpha = .65$ を越える信頼性係数が確認され、併存的妥当性も示され

ている。

2) 対人過敏・自己優先尺度(短縮版)

村中・山川・坂本(2017)によって作成された22項目からなる「新型うつ」に関連するパーソナリティを測定する尺度である。2つの上位因子である「対人過敏傾向」と「自己優先志向」がそれぞれ下位因子をもつ二次因子構造になっている。「対人過敏傾向」は、「評価への過剰な反応」、「評価への敏感さ」、「回避」の3下位尺度で構成され、「自己優先志向」は、「独善」、「被害者意識」、「成果依存」の3下位尺度で構成されている。「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で回答する。因子の妥当性、基準関連妥当性、再検査信頼性が示されている。

3) 「新型うつ」の症状・心理・行動特性項目

胸元・松元・増田(2015)によって作成された質問項目である。「新型うつ病」に関する文献を参考にして、いわゆる「新型うつ病」の特徴と考えられる症状・性格・行動について14項目を抽出し作成した。質問項目に対して、「はい」、「いいえ」の2件法で回答する。胸元ら(2015)は、若年型うつ病患者を対象とした研究で、この14項目を用いており、これらの項目に対して、対象者の50%以上が、「はい」と回答しており、基準関連妥当性が示されている。

4) SDS 自己評価式抑うつ性尺度

Zungによる20項目を基に、福田・小林が作成した尺度である(1983)。「主感情」を測定する2項目、「心理的随伴症状」を測定する10項目、「生理的随伴症状」を測定する8項目から構成され、「ない、たまに」から「ほとんどいつも」の4件法で回

答する。本研究では、この尺度を「従来型うつ」の測定に用いた。

Ⅲ 結果

1. 各尺度の相関関係

認知の歪み尺度の下位尺度である「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」、対人過敏・自己優先尺度の下位尺度である「対人過敏傾向」、「自己優先志向」と、「新型うつ」および「従来型うつ」の下位尺度である「主感情」、「心理的随伴症状」、「生理的随伴症状」の関係を検討するため、Pearson 積率相関係数を算出し、結果を Table 1 に示した。

認知的特徴である、「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」においては「対人過敏傾向」、「自己優先志向」、それに、「従来型うつ」、「主感情」、「心理的随伴症」、「生理的随伴症状」との間に有意な正の相関がみられた。「認知の偏り」と「思考の非柔軟性」では、「生理的随伴症状」を除いて、比較的強い相関が認められた。また、

パーソナリティの「対人過敏傾向」、「自己優先志向」においては、「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」、それに、「従来型うつ」、「主感情」、「心理的随伴症」、「生理的随伴症状」との間に有意な正の相関がみられた。「対人過敏傾向」では、「生理的随伴症状」を除いて、比較的強い相関が認められた。さらに、「従来型うつ」の下位尺度である「主感情」、「心理的随伴症状」、「生理的随伴症状」においては、「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」と「対人過敏傾向」、「自己優先志向」との間に有意な正の相関がみられた。「主感情」では、「自己優先志向」を除いて、比較的強い相関が認められた。「生理的随伴症状」では、「推論の誤り」、「主感情」、「従来型うつ」を除いて、弱い相関が認められた。「心理的随伴症状」では、「生理的随伴症状」を除いて、比較的強い相関が認められた。しかし、「新型うつ」は、各尺度との間に相関は、認められなかった。

Table 1 平均, 標準偏差, ピアソンの相関係数

変数	M	(SD)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 認知の偏り	41.44	7.69	—								
2. 推論の誤り	102.82	22.27	.72**	—							
3. 思考の非柔軟性	22.64	6.79	.60**	.76**	—						
4. 対人過敏傾向	39.31	8.19	.61**	.72**	.61**	—					
5. 自己優先志向	26.56	8.45	.39**	.45**	.47**	.40**	—				
6. 新型うつ	20.42	2.01	-.18	-.11	-.04	-.08	-.08	—			
7. 主感情	4.13	1.48	.44**	.58**	.49**	.45**	.34**	-.07	—		
8. 生理的随伴症状	18.58	3.13	.27**	.42**	.27**	.26**	.23**	-.02	.41**	—	
9. 心理的随伴症状	24.9	4.86	.51**	.58**	.53**	.51**	.48**	-.17**	.51**	.28**	—
10. 従来型うつ	47.61	7.44	.54**	.67**	.55**	.53**	.48**	-.13*	.70**	.69**	.87**

** $p < .01$, * $p < .05$

2. 重回帰分析

1) パーソナリティと認知的特徴を変数とする重回帰分析

新型うつに関連するパーソナリティと認知的特徴が、「従来型うつ」と「新型うつ」にどのような影響を及ぼすのかを検討するために重回帰分析を行った。「従来型うつ」と「新型うつ」、さらに「従来型うつ」の下位尺度である「主感情」、「生理的随伴症状」、「心理的随伴症状」をそれぞれ従属変数とし、対人過敏・自己優先尺度の下位尺度である「対人過敏傾向」と「自己優先志向」、そして、認知の歪み尺度の下位尺度である「認知の偏り」と「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」を独立変数とした重回帰分析を行った。各分析の結果を Table 2 に示す。

「従来型うつ」を従属変数とした分析では、「推論の誤り」と「自己優先志向」がその説明に寄与し、合計で49.2%の分散を説明した。「推論の誤り」、「自己優先志向」が「従来型うつ」に正の影響を及ぼすことが示された。「主感情」を従属変数とした分析では、「推論の誤り」がその説明に寄与し、33.8%の分散を説明した。「推論の誤り」が「主感情」に正の影響を及ぼすことが示された。「生理的随伴症状」を従属

変数とした分析では、「推論の誤り」がその説明に寄与し、17.8%の分散を説明した。「推論の誤り」が「生理的随伴症状」に正の影響を及ぼすことが示された。「心理的随伴症状」を従属変数とした分析では、「推論の誤り」、「自己優先志向」、「認知の偏り」がその説明に寄与し、40.8%の分散を説明した。「推論の誤り」、「自己優先志向」、「認知の偏り」が「心理的随伴症状」に正の影響を及ぼすことが示された。しかし、「新型うつ」を従属変数とし、「対人過敏傾向」、「自己優先志向」と「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」を独立変数として行った重回帰分析では、統計的有意な結果は得られなかった。

2) パーソナリティと認知的特徴の各下位尺度の重回帰分析

新型うつに関連するパーソナリティと認知的特徴のそれぞれの下位尺度は、「従来型うつ」と「新型うつ」にどのような影響を及ぼすのかを検討するために重回帰分析を行った。パーソナリティでは、「対人過敏傾向」の下位尺度である「評価への過剰な反応」、「評価への敏感さ」、「回避」と、「自己優先志向」の下位尺度である「独善」、「被害者意識」、「成果依存」を独立変数とした。さらに、認知的特徴では、「認知の

Table 2 パーソナリティと認知的特徴を独立変数とする重回帰分析

独立変数	従来型うつ $R^2 = .49$		主感情 $R^2 = .34$		生理的随伴症状 $R^2 = .18$		心理的随伴症状 $R^2 = .41$	
	β	t 値	β	t 値	β	t 値	β	t 値
自己優先志向	.22	4.45***	—	—	—	—	.26	4.78***
認知の偏り	—	—	—	—	—	—	.16	2.29*
推論の誤り	.58	11.72***	.58	11.62***	.42	7.57***	.35	4.96***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

偏り」の下位尺度である「全か無か思考」, 「肯定面の否認」, 「選択的抽出」と, 「推論の誤り」の下位尺度である「過度の一般化」, 「破局視」, 「恣意的推論」, 「因果関係づけ」, 「自己関連づけ」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」, 「否定的予測」と, 「思考の非軟性」の下位尺度である「断定的思考」, 「誤ったレッテル貼り」を独立変数とした重回帰分析を行った。各分析の結果を Table 3 に示す。

「従来型うつ」を従属変数とした分析では, 「抽象的な質問」, 「被害者意識」, 「過度の一般化」, 「感情的理由づけ」, 「誤ったレッテル貼り」がその説明に寄与し, 合計で52.5%の分散を説明し, 「従来型うつ」に正の影響を及ぼすことが示された。「主感情」を従属変数とした分析では, 「抽象的な質問」, 「評価への過剰な反応」, 「感情的理由づけ」, 「被害者意識」, 「破局視」, 「回避」がその説明に寄与し, 42.1%の分散を説明した。「抽象的な質問」, 「破局視」,

「評価への過剰な反応」, 「被害者意識」, 「感情的理由づけ」が「主感情」に正の影響を及ぼすことが示され, 「回避」が, 「主感情」に負の影響を及ぼすことが示された。「生理的随伴症状」を従属変数とした分析では, 「感情的理由づけ」, 「被害者意識」, 「破局視」, 「恣意的推論」がその説明に寄与し, 20.0%の分散を説明し, 「生理的随伴症状」に正の影響を及ぼすことが示された。「心理的随伴症状」を従属変数とした分析では, 「抽象的な質問」, 「独善」, 「誤ったレッテル貼り」, 「過度の一般化」がその説明に寄与し, 43.4%の分散を説明し, 「心理的随伴症状」に正の影響を及ぼすことが示された。しかし, 「新型うつ」を従属変数とし, 「対人過敏傾向」の下位尺度である「評価への過剰な反応」, 「評価への敏感さ」, 「回避」と, 「自己優先志向」の下位尺度である「独善」, 「被害者意識」, 「成果依存」, さらに, 「認知の偏り」の下位尺度である「全か無か思考」, 「肯定面の否認」, 「選択

Table 3 パーソナリティと認知的特徴の下位尺度を独立変数とする重回帰分析

独立変数	従来型うつ $R^2 = .53$		主感情 $R^2 = .42$		生理的随伴症状 $R^2 = .20$		心理的随伴症状 $R^2 = .43$	
	β	t 値	β	t 値	β	t 値	β	t 値
評価への過剰な反応	—	—	.19	3.12**	—	—	—	—
回避	—	—	-.13	-2.49*	—	—	—	—
独善	—	—	—	—	—	—	.19	3.74***
被害者意識	.18	3.91***	.14	2.73**	.15	2.55*	—	—
過度の一般化	.20	3.21**	—	—	—	—	.14	2.16*
破局視	—	—	.16	2.59*	.15	2.20*	—	—
恣意的推論	—	—	—	—	.15	2.14*	—	—
感情的理由づけ	.15	2.97**	.17	2.84**	.18	2.71**	—	—
抽象的な質問	.27	4.57***	.28	4.42***	—	—	.27	4.23***
誤ったレッテル貼り	.16	2.42*	—	—	—	—	.24	3.32**

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

的抽出」と、「推論の誤り」の下位尺度である「過度の一般化」, 「破局視」, 「恣意的推論」, 「因果関係づけ」, 「自己関連づけ」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」, 「否定的予測」と、「思考の非柔軟性」の下位尺度である「断定的思考」, 「誤ったレッテル貼り」を独立変数として行った重回帰分析では統計的に有意な結果は得られなかった。

3) 新型うつに関連するパーソナリティの重回帰分析

「認知の偏り」, 「推論の誤り」, 「思考の非柔軟性」の認知的特徴が、「新型うつ」に関連するパーソナリティにどのような影響を及ぼすのかを検討するために重回帰分析を行った。対人過敏・自己優先尺度の下位尺度である「対人過敏傾向」, 「自己優先志向」を従属変数として、認知の歪み尺度

の「認知の偏り」の下位尺度である「全か無か思考」, 「肯定面の否認」, 「選択的抽出」と、「推論の誤り」の下位尺度である「過度の一般化」, 「破局視」, 「恣意的推論」, 「因果関係づけ」, 「自己関連づけ」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」, 「否定予測」と、「思考の非柔軟性」の下位尺度である「断定的思考」, 「誤ったレッテル貼り」を独立変数とした重回帰分析を行った。各分析の結果を Table 4 と Table 5 に示す。

① 「対人過敏傾向」を従属変数とした重回帰分析

「対人過敏傾向」を従属変数とした重回帰分析においては、「恣意的推論」, 「過度の一般化」, 「否定的予測」, 「自己関連づけ」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」がその説明に寄与し、合計で、64.3%の分散を説明した。「恣意的推論」, 「過度の一

Table 4 対人過敏傾向を従属変数とする重回帰分析

独立変数	β	t 値	有意水準
恣意的推論	.394	8.251	< .001
否定的予測	.184	3.080	< .01
過度の一般化	.234	4.402	< .001
感情的理由づけ	.141	3.173	< .01
自己関連づけ	-.142	-3.332	< .01
抽象的な質問	.131	2.384	< .05

($R^2 = .64$, $F [6/259] = 77.86$, $p < .001$)

Table 5 自己優先志向を従属変数とする重回帰分析

独立変数	β	t 値	有意水準
過度の一般化	.182	2.195	< .05
断定的思考	.187	3.281	< .01
全か無か思考	.194	3.585	< .001
破局視	.196	2.385	< .05

($R^2 = .30$, $F [4/261] = 28.35$, $p < .001$)

般化), 「否定的予測」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」が「対人過敏傾向」に正の影響を及ぼすことが示され, 「自己関連づけ」が「対人過敏傾向」に負の影響を及ぼすことが示された(Table 4)。

②「自己優先志向」を従属変数とした重回帰分析

「自己優先志向」を従属変数とした重回帰分析においては, 「破局視」, 「全か無か思考」, 「断定的思考」, 「過度の一般化」がその説明に寄与し, 合計30.3%の分散を説明し, 「自己優先志向」に正の影響を及ぼすことが示された(Table 5)。

3. 二元配置分散分析

「従来型うつ」の平均得点を基に「従来型うつ高群・従来型うつ低群」に分け, 「新型うつ」の症状・心理・行動特性項目得点の標準偏差を基に「新型うつ高群・新型うつ中群・新型うつ低群」に分けて, 新型うつ得点のみが高い人の特性を明らかにするために, 対人過敏・自己優先尺度の下位尺

度及び, 認知的特徴の下位尺度について二元配置分散分析を行い, 結果を Table 6 に示した。

「対人過敏傾向」を従属変数とした分析では, 「従来型うつ」2群($F=22.43, df=1/260, p<.01$)の主効果には有意な差がみられたが, 「新型うつ」3群($F=14.77, df=2/260, n.s.$)の主効果には有意な差は見られなかった。交互作用も有意な差が得られなかった。「自己優先志向」を従属変数とした分析では, 「従来型うつ」2群($F=15.50, df=1/260, p<.05$)の主効果に有意な差がみられたが, 「新型うつ」3群($F=5.04, df=2/260, n.s.$)の主効果には有意な差は見られなかった。交互作用も有意な差が得られなかった。「認知の偏り」を従属変数とした分析では, 「従来型うつ」2群($F=3.86, df=1/260, n.s.$)の主効果に有意な差が見られず, 「新型うつ」3群($F=1.92, df=2/260, n.s.$)の主効果にも有意な差は見られなかった。交互作用も有意な差が得られなかった。「推論の誤り」を従属変数と

Table 6 従来型うつ高群・低群×新型うつ高群・中群・低群の二元配置分散分析

変数	従来型うつ高群 (n=140)			従来型うつ低群 (n=126)			従来型うつ	新型うつ	交互作用 F
	新型うつ高群 (n=23)	新型うつ中群 (n=111)	新型うつ低群 (n=6)	新型うつ高群 (n=13)	新型うつ中群 (n=100)	新型うつ低群 (n=13)	主効果	主効果	
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F	F	
対人過敏傾向	45.91 (5.69)	41.86 (7.06)	41.17 (6.85)	42.08 (6.24)	35.18 (7.70)	34.00 (9.49)	22.43**	14.77	.57
自己優先志向	32.91 (9.18)	29.78 (7.85)	25.50 (6.72)	26.31 (6.58)	22.13 (6.68)	22.69 (8.62)	15.50*	5.04	.82
認知の偏り	45.13 (6.14)	44.60 (6.67)	39.83 (5.64)	43.31 (5.56)	37.55 (7.65)	36.62 (5.16)	3.86	1.92	2.46
推論の誤り	123.30 (18.50)	112.41 (18.69)	108.33 (7.79)	97.23 (20.59)	90.40 (19.10)	83.38 (16.42)	97.80***	21.02*	.20
思考の柔軟性	27.26 (6.61)	25.35 (6.17)	24.83 (3.87)	21.62 (4.43)	19.37 (5.95)	16.54 (5.41)	59.21***	8.23	.31

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

した分析では、「従来型うつ」2群($F=97.80$, $df=1/260$, $p<.001$)の主効果に有意な差が見られ、「新型うつ」3群($F=21.02$, $df=2/260$, $p<.05$)の主効果にも有意な差がみられたため、多重比較を行った。「新型うつ」の低群と高群($p<.01$)、中群と高群($p<.01$)間に有意な差が見られ、「新型うつ」の得点が高い群に「推論の誤り」が多くみられることが示された。交互作用には有意な差が得られなかった。「思考の非柔軟性」を従属変数とした分析では、「従来型うつ」2群($F=59.21$, $df=1/260$, $p<.001$)の主効果に有意な差がみられたが、「新型うつ」3群($F=8.23$, $df=2/260$, $n.s.$)の主効果には有意な差は見られなかった。交互作用も有意な差が得られなかった。

IV 考察

本研究の目的は、SDS 自己評価式抑うつ性尺度の高得点者を「従来型うつ」とし、また、「新型うつ」の質問項目で特徴を多く示した人を「新型うつ」として、それぞれが「新型うつ」に関連するパーソナリティの傾向を示すのか、さらに、どのような認知的特徴があるのかについて検証を行うことであった。そして、「新型うつ」に関連するパーソナリティである「対人過敏傾向」や「自己優先志向」の傾向がある人は、どのような認知的特徴があるのかについても検証を行った。

まず、「従来型うつ」、「新型うつ」を多く呈する人が、「新型うつ」に関連するパーソナリティの傾向があるのか、さらに、どのような認知的特徴があるのかを調べるために、対人過敏・自己優先尺度の下位尺度

である「対人過敏傾向」、「自己優先志向」、そして、認知の歪み尺度の下位尺度である「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」を独立変数とし、「従来型うつ」と「新型うつ」、さらに「従来型うつ」の下位尺度である「主感情」、「生理的随伴症状」、「心理的随伴症状」をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った。「対人過敏傾向」、「自己優先志向」、「認知の偏り」、「推論の誤り」、「思考の非柔軟性」の下位尺度を独立変数とした重回帰分析も行っている。「従来型うつ」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「従来型うつ」を多く呈する人は、「自己優先志向」、「被害者意識」のパーソナリティ傾向が高く、「推論の誤り」、「抽象的な質問」、「過度の一般化」、「感情的理由づけ」、「誤ったレッテル貼り」の認知的特徴が高いことが示された。「主感情」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「主感情」を多く呈する人は、「評価への過剰な反応」、「被害者意識」のパーソナリティ傾向が高く、「回避」の傾向は低く、また、「推論の誤り」、「抽象的な質問」、「感情的理由づけ」、「破局視」の認知的特徴が高いことが示された。「生理的随伴症状」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「生理的随伴症状」を多く呈する人は、「被害者意識」のパーソナリティ傾向が高く、「推論の誤り」、「感情的理由づけ」、「破局視」、「恣意的推論」の認知的特徴が高いことが示された。「心理的随伴症状」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「心理的随伴症状」を多く呈する人は、「自己優先志向」、「独善」のパーソナリティ傾向が高く、「推論の誤り」、「認知の偏り」、「抽象的な質問」、「誤ったレッ

テル貼り」,「過度の一般化」の認知的特徴が高いことが示された。

これらの重回帰分析の結果より, 青年期女子において「従来型うつ」を多く呈する人は, 「自己優先志向」のパーソナリティの傾向が高く, 「自己優先志向」のなかでも, 自分の問題を周囲や状況のせいにする他責的な「被害者意識」の傾向が高いことが指摘できる。さらに, 「従来型うつ」の下位尺度である「心理的随伴症状」の高い人は, 自分の思い通りにできないと嫌だといった自己中心的な「独善」の高さがみられた。これは, 青年期女子の「うつ」におけるパーソナリティが, 真面目, 几帳面, 完全主義とされる「従来型うつ」のパーソナリティ傾向とは異なることを示唆する。また, 「従来型うつ」を多く呈する人の認知的特徴として, 「推論の誤り」が高く, その下位尺度において, 「抽象的な質問」が特に高かった。これは, 答えが出ない問題を頭の中で繰り返し考え続けても, 答えが見つけれられず, 対処不能とするといった, 青年期特有の悩みによるものと言えるかもしれない。

続いて, 「従来型うつ」の高群, 低群と「新型うつ」の高群, 中群, 低群を独立変数とし, 「対人過敏」, 「自己優先志向」, 「認知の偏り」, 「推論の誤り」, 「思考の非柔軟性」を従属変数として, 二元配置分散分析を行った。その結果, 「対人過敏傾向」, 「自己優先志向」, 「思考の非柔軟性」を従属変数とした分析では, 「従来型うつ」の主効果のみに有意な差がみられた。「推論の誤り」を従属変数とした分析では, 「従来型うつ」と「新型うつ」の主効果に有意な差が見られ, 「認知の偏り」を従属変数とし

た分析では, 「従来型うつ」, 「新型うつ」, いずれの主効果, 交互作用においても有意な結果が得られなかった。このことから, 青年期女子で「従来型うつ」を多く呈する人は, 「新型うつ」に関連するパーソナリティである「対人過敏傾向」, 「自己優先志向」の傾向が高いこと, さらに, 「推論の誤り」や「思考の非柔軟性」の認知的特徴についても高いことが示された。また, 青年期女子で「新型うつ」を多く呈する人には, 「推論の誤り」の高さのみが認められた。パーソナリティ, 認知的特徴の各下位尺度を従属変数としたいずれの分析においても, 交互作用に有意な差は認められなかった。本研究では, 「従来型うつ」の症状を多く呈する青年期女子には, 「新型うつ」のパーソナリティ特徴も多くみられ, 青年期女子の「新型うつ」にみられる認知の歪みが「従来型うつ」にも認められる結果となった。

「新型うつ」に関連する「対人過敏傾向」, 「自己優先志向」のパーソナリティでは, どのような認知的特徴があるのかを検証するために, 重回帰分析を行った。「対人過敏傾向」を従属変数とした重回帰分析の結果から, 「対人過敏傾向」のパーソナリティ傾向が高い人は, 「恣意的推論」, 「過度の一般化」, 「否定的予測」, 「感情的理由づけ」, 「抽象的な質問」の認知的特徴が高い一方で, 「自己関連づけ」の認知的特徴の低くさがみられた。他者の顔色やちょっとした対応だけで, 否定的に判断しがちな「恣意的推論」は, 他者からどう見られているかを気にして, 悪くとらえる傾向があり, 対人過敏的な様子が窺える。また, 「自己関連づけ」が低いことから, 自分とは関

係のないことまで、自分に責任があると感じてしまう自責的な傾向は弱いことを意味する。この結果は、対象者が青年期女子であったことが影響しているかもしれない。そして、将来を否定的に考え、失敗を予測する「否定的予測」や、自らの感情を理由に、やるべきことが困難に思えたり、中止したりする「感情的理由づけ」が高いことから、これからのことを悲観的に考える認知的特徴がみられた。続いて、「自己優先志向」を従属変数とした重回帰分析の結果から、「自己優先志向」のパーソナリティ傾向のある人は、現実から離れて、断定的、絶対的な考えをもつ「断定的思考」や、曖昧さや中間を認めないような二者択一に考える「全か無か思考」の認知的特徴が高いことから、思考に柔軟性がない特徴が考えられる。また、ちょっとした困難や失敗だけで、悲劇的な結末や不幸を想像する「破局視」も高いことから、短絡的に事態を決定づけてしまう傾向が窺える。そして、「対人過敏傾向」及び「自己優先志向」に共通して、「過度の一般化」が高いことが示された。わずかな事実や出来事をもとに、全てのことを一つの次元でとらえたり、一般化してしまう認知は、世の中の多くの事柄を、経験値の低い、狭い視野で決めつけようとする特徴といえる。それらの特徴は、「対人過敏傾向」、「自己優先志向」に共通のものであるとともに、本研究の対象者である青年期女子に特有の認知の現れなのかもしれない。

村中ら(2015)の研究において、「自己優先志向」に含まれるパーソナリティ特徴は、「従来型うつ」には見られず、「新型うつ」のみに見られる特徴であるという結果

を得ている。本研究においては、SDS自己評価式抑うつ性尺度で測定される従来型うつ症状の高い青年期女子には高い「自己優先志向」がみられた。本研究の結果は、うつ症状を呈する青年期女子においては「従来型うつ」の特徴と「新型うつ」の特徴を併せ持つことが示唆された。したがって、うつ症状を呈する青年期女子に対しては、そのパーソナリティ傾向や、認知的特徴から症状や行動傾向を理解して、介入方法、心理的支援を検討していく必要があると考える。

今後の課題として、今回の研究は、健常の女子大学生が対象であり、うつ病患者群ではないため、「うつ病」、「新型うつ病」に関する検証には限界があった。しかるべき医療機関において、青年期のうつ病患者を対象とした、さらなる研究が必要であるといえる。さらに、「新型うつ」の定義に様々な見解があり、「新型うつ」を測定する尺度は開発されていない。本研究では、胸元ら(2015)が作成した14の質問項目を利用したが、中間の得点者が圧倒的に多い結果となったため、重回帰分析及び相関において統計的有意な結果を得ることが出来なかった。「新型うつ」について、さらなる分析を行い、その特徴を捉えた尺度の開発を検討していくことも今後の課題であると考えられる。最後に、女子大学生だけでなく男子学生を対象とした研究を行い、性差の偏りなく、青年期の「うつ」に関する検証を行うことも必要である。

〈付記〉本研究は跡見学園女子大学倫理委員会において厳正な審査を受け、承認を得た上で行なっている。

文献

- 阿部隆明(2011). 気まぐれで未熟な「新型うつ病」—現代うつ病の精神病理—. 臨床心理学, 12, 469-475.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press. 坂野雄二(監訳)神村栄一・清水里美・前田基成(共訳)(1992). うつ病の認知療法 東京: 岩崎学術出版社
- Burns, D. D. (1980). *Feeling good: The new mood therapy*. New York: Avon Books. 野村総一郎・夏刈郁子・山岡功一・成瀬梨花(訳)(1990). いやな気分よさようなら. 星和書店
- 福田一彦・小林重雄(1983). 「日本版自己評価式抑うつ性尺度」. 三京房.
- 生田孝(2014). 臨床現場における「新型うつ病」について. 労働安全衛生研究, 7(1), 13-21.
- 三川俊樹(2004). 認知の歪みと主観的不健康感の関係(2). 追手門学院大学人間学部紀要, 17, 57-72.
- 胸元孝夫・松元理恵子・増田彰則(2015). 南九州地方の若年型うつ病患者のレジリエンス. 南九州地域科学研究所所報, 31, 41-45.
- 村中昌紀・山川樹・坂本真士(2015). 専門家は「新型うつ」をどのようにとらえているか—書籍から抽出と臨床家への調査—. 日本大学心理学研究, 36, 44-51.
- 村中昌紀・山川樹・坂本真士(2017). 対人過敏・自己優先尺度の作成—「新型うつ」の心理学的特徴の測定—. 心理学研究, 87(6), 622-632.
- 及川恵・坂本真士(2007). 女子大生を対象とした抑うつ予防のための心理教育プログラムの検討—抑うつ対処の自己効力感の変容を目指した認知行動的介入—. 教育心理学研究, 55, 106-119.
- 坂野雄二(1995). 認知行動療法. 日本評論社.
- 関陽一・根津克己(2015). 「新型うつ」性格傾向と抑うつに関連についての心理学的考察—ストレス対処能力(Self of Conherence; SOC)に焦点をあてて—. 東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 9-18.